

## 小学校音楽科における対話的な鑑賞活動

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 吉原 若菜

### 1. 研究の背景

小学校音楽科の指導では、音楽を聞いてそのよさや楽しさを感じ取る鑑賞が、重要な内容として位置づけられている。しかし、音楽の表現と比べても、鑑賞は児童にとって決して簡単ではない。私自身、自分が音楽の授業を受けている側だったときに、鑑賞の授業の際にどのような意見を持てばいいのか分からず苦手意識を持っていた。

また、中央教育審議会答申「令和の「日本型学校教育」の構築をめざして」(2021)を受け、現在、「主体的・対話的で深い学び」の視点をもった授業づくりが求められている。「主体的・対話的で深い学び」の視点をもった小学校音楽科の授業を鑑賞の分野において考えると、児童が音楽をただ体験するだけでなく、自分の感じ方や考え方を表現し、他者との対話を通じて鑑賞することで、音楽への理解を深めていくことが重要ではないかと考える。小学校学習指導要領(2017)には、音楽科の指導計画の作成と内容の取り扱いとして、児童の主体的・対話的で深い学びを実現する際に、他者と協働することが示されている。

題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさなどを見いだしたりするなど、思考、判断し、表現する一連の過程を大切にした学習の充実を図ること。

さらに、小学校学習指導要領解説音楽編(2017)では、鑑賞の活動について、言葉などで伝え合う

活動が大切にされている。

鑑賞の活動の中で、低学年で味わった楽しさを基盤にしながら、音楽から感じ取ったことを、言葉や体の動きで表して伝え合うなどの活動を効果的に取り入れて、曲や演奏のよさなどを見いだしながら、音楽を全体にわたって味わって聴く楽しさを感じ取れるように指導することが大切である。

児童の主体的・対話的で深い学びの実現のためには、音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働することや、伝え合う活動によって曲や演奏のよさなどを見いだすことが、重要であると考えられている。

### 2. 研究の目的

本研究は、小学校音楽科の鑑賞において主体的・対話的な学びを実現する活動のあり方を探ることを目的とする。この活動のなかで、児童が他者との対話を通して新たな視野を得ることで、音楽をより味わって聴こうとする姿や、児童の学びの深まりを目指す。そのために、授業実践の中で、児童が主体的に鑑賞活動に参加したり、より味わって聴いたりできるように工夫を行う。授業終了後、こうした工夫の効果を分析していく。

### 3. 先行研究

児童が他者との対話を通して新たな視野を得ることで、音楽をより味わって聴こうとする姿や、児童の学びの深まりを目指すために、本研究では美術における対話的鑑賞 Visual Thinking Strategies(VTS)を参照する。VTSは、アメリカに

において F. ヤノウィンらにより開発された鑑賞の方法である。美術館における鑑賞プログラムの一つとして提起されたものであるが、近年は学校教育の現場においても、美術教育における鑑賞教育の方法として注目を集めている。VTSでは、他者との対話を通じた鑑賞の中で、鑑賞者は作品に対する多様な見方を獲得すると同時に、個人では気づくことのできなかつた新たな作品に対する意味を見出すことが可能になるとされている。ファシリテーターと呼ばれる進行役がする質問は「1. この作品の中で、どんな出来事がおこっていますか?」「2. 作品のどこからそう思いましたか?」「3. もっと発見はありますか?」の3つに限定されている。他にファシリテーターは、鑑賞者の発言の箇所を指で指し示す「ポイントィング」、発言に対し言い換えをする「パラフレーズ」、それぞれの意見を結びつけていく「リンク」といった手法を使いながら、作品の鑑賞を進めていく。

音楽の鑑賞における対話型鑑賞の事例としては松田・藤田(2022)による中学校音楽の授業考察がある。導入部分で知識を先行して教えるのではなく自由な視点から鑑賞し、生徒がグループでそれぞれの知覚・感受や、「なぜそう思ったか」を伝え合う活動が行われている。

#### 4. 研究の方法

本研究では、山梨県内の公立小学校第3学年の児童を対象として、授業を実践した。

授業実践を行う前の期間では、授業観察などを通して、児童の音楽との関わり方や、他教科でも対話的活動がどのように取り入れられているのか、先生と児童の関わり方や先生からの声掛けの仕方、普段の児童の学習に取り組む態度といった観点で実態の把握に努めた。対象学級は、積極的に発言しようとする児童が多くいて、他の児童の発言に反応して話したりすることも多く、発言力があることが観察からわかった。音楽科の授業は週に2時間あり、普段の授業の進め方としては、歌唱やリコーダーの活動に時間を区切って次々と取り組ませていた。また、少なくと

も第3学年になってからは、授業として時間をかけて鑑賞に取り組んだことはないとのことだった。

授業実践では鑑賞の授業として、2つの曲を比較しながら自分なりに音楽を捉える。そして、グループでの意見交換や全体での共有など、児童が発言する機会を多く設けるなど、児童が主体的に鑑賞活動に参加したり、より味わって聴いたりできるように工夫を行う。

授業終了後は、授業中の児童の発言の文字起こしを行い、対話が見られた場面や、音楽の要素に触れた発言を取り上げて考察する。また、ワークシートの記述から意見が変容している児童を取り上げ、どの場面で意見が変わったのか、分析を行う。これにより、授業の工夫の効果、特に鑑賞における対話の役割を検討する。

### 5. 授業実践について

#### 5-1. 鑑賞曲の選定と授業の目標

授業数は全1時間、令和7年11月に実施した。対象は、山梨県内公立小学校第3学年の1クラス15名である。

鑑賞曲として「小鳥のために」(作曲者不詳)より《スズメ》《ムクドリ》の2曲を取り上げた。この曲は、教育芸術社『小学生の音楽3』では「リコーダーのひびきに親しもう」という題材の参考曲として収録されているもので、リコーダーで演奏されている。この学級の児童は音楽の授業のなかでリコーダーに取り組んでいる最中であつた。また、小鳥をモチーフにしている曲であるため、児童が自分の経験を通じて曲に耳を傾けられる教材になると考えた。児童の意見を引き出し対話的に鑑賞を行うには、児童の日常の体験を踏まえた教材がふさわしいと考え、具体的に想像しながら鑑賞することができる教材として選んだ。観賞用CDには《スズメ》《ムクドリ》の他に《森ヒバリ》という曲もあつたが、比較しながら鑑賞する際に、3曲の比較は難しいため、この2曲に絞った。

授業の目標を、「スズメとムクドリの曲を聴いて曲の中に手がかりを求め、自分なりにどちらがスズメでどちらがムクドリか予想しながら鑑

賞することで、他者との対話により色々な感じ方や音楽の要素に着目して聴くことができる。」と設定した。2曲を比較し、スズメなのかムクドリなのかを予想しながら授業を進めていくが、あくまでもクイズや答え合わせのように正解を求めるのではなく、よく聴くための教材の工夫として曲の対比を取り入れた。

## 5-2. 授業内容

授業は次のように構成した。

[1]	鑑賞する曲が何を表しているか予想する
[2]	どんな鳥と鳴き声を知っているか
[3]	スズメとムクドリの鳴き声を聞いて、その特徴を考える
[4-1]	2曲両方を聴く
[4-2]	曲①はどちらか考える
[4-3]	曲②はどちらか考える
[5]	2曲の冒頭を聴き比べる
[6]	曲を部分的に取り上げて鑑賞する

[1] では、教師は事前に何も説明せずに《スズメ》《ムクドリ》の2曲を流し、児童は、何を表しているのか予想した。児童は曲を聴いてすぐに鳥を表していることに気づき、リコーダーで演奏されていることに気づいた発言もあった。

[2] では、[1] での鳥を表している曲であるという発言話から児童の経験につなげ、どんな鳥を知っているか、その鳥はどんな鳴き声かを自由に発言させた。

[3] では、鑑賞する曲のタイトルにある「スズメ」「ムクドリ」の写真を見せながら鳴き声の音源を聞き、それぞれの特徴について考えた。曲は鳥の鳴き声をそのまま表したものではないので、スズメとムクドリの写真を見せたり、自分たちの体験を思い出すことによってそれぞれの鳥の印象を感じとれるようにした。児童はスズメについてはよく知っているが、ムクドリは名前を聞いたことはあるがどんな鳥か、どんなふうに鳴くかほとんど誰も知らない様子だった。実際、ムクドリは叫ぶように鳴いたり綺麗に鳴いたり様々な鳴き方をするため、「ビャービャー」と聞こえる鳴き声の音源を聞かせるだけでなく、

図鑑から引用したムクドリの鳴き声「キーキー、コロココロン、ウギャー、コンコンコンコロ、キチ、キチ、キチ」を、センテンスカード（以下SC）として提示した。

児童は最初に2曲を続けて聴いたあと、《スズメ》（以下曲①）を聴いてスズメかムクドリかを予想し、理由も合わせてワークシートに記入した。個人で考えた後は班ごとに予想を共有し、その後クラスでも共有した。次に《ムクドリ》（以下曲②）を聴いてスズメかムクドリかを予想し、ワークシートへ記入後、班ごとに予想を共有し、クラスでも共有できるようにした。

[5] では曲①②それぞれの冒頭を取り上げて聴き比べ、感じたことやなぜそう思うのかをクラス全体で意見を共有した。短い部分を取り上げることで、音の高さや速さの違いに気づくことができるようにした。

[6] では、曲①を聴き、曲想が変化したと感じる部分で児童が挙手をした。変化したと感じる部分(0:19)までを取り上げ再び聴いて、どのように変化しているのか、なぜ変化したと思ったのかを児童に聞いた。また、音楽からスズメやムクドリのどんな様子が感じられるか考えた。(曲②でも同様に変化した部分(0:09)を取り上げて考え、それぞれを全体で意見共有した。

次に、授業内で用いたワークシートを示す。

【2025年】音楽の鑑賞（11月18日（火）5時間目（13:40-14:25）吉原若葉）

小学校3年1組 [ ] 班 氏名 [ ]

(1) 1曲目の予想（スズメ・ムクドリ）  
どうしてそう思いましたか。

(2) 2曲目の予想（スズメ・ムクドリ）  
どうしてそう思いましたか。

(3) 1曲目の予想(2回目)（スズメ・ムクドリ）  
どうしてそう思いましたか。

(4) 2曲目の予想(2回目)（スズメ・ムクドリ）  
どうしてそう思いましたか。

(5) 今日の授業の感想

ワークシートの上2つ (1) (2) は [4-2] での曲①の予想を書く欄と、[4-3] での曲②の予想を書く欄である。スズメかムクドリかどちらかを選択し、どうしてそう思ったのか理由を書く欄を設けた。その下2つ (3) (4) は、[5] で2曲の冒頭を比較したり、[6] で曲想の変化を聴き取ったりする活動を経て、自分の予想が変化した場合に書く欄として設けた。(1) (2) と同様に、曲①の予想を書く欄と曲②の予想を書く欄で、スズメかムクドリかどちらかを選択し、どうしてそう思ったのか理由を書く欄を設けた。最後の (5) は授業の最後に感想を書く欄として設けた。

## 6. 授業の分析と考察

### 6-1. 発話記録の分析

以下では、実際の授業での発話の記録をもとに、分析を行う。曲① (《スズメ》) を聴いた [4-2] でのやり取りの一部を取り上げる。

T: じゃあ、予想したものを教えてください  
 C: ムクドリだと思います  
 T: 何を手掛かりに、そう思った?  
 C6: 次から次へと、なんか歌が違くなってる  
 C9: 最後らへんでキチキチキチに似てるように聞こえた  
 C11: 途中でコロコロってなった気がした  
  
 C4: スズメだと思います  
 T: 何を手掛かりに、そう思った?  
 C4: 声の音が低いから

曲①は、ムクドリと予想した児童がほとんどだった。「歌が違くなってる」と発言した児童がいて、それをもとにムクドリと思ったと言っているが、ムクドリは色々な鳴き方をするという紹介をしたため、メロディーの印象や曲想が変わっていったと感じ取ったことをもとに、それがムクドリの鳴き声に近いと判断したようだった。

スズメと予想する児童は少なかったが、音の高

さを鳴き声の高さとして聞き取っている児童がいた。

また、「キチキチキチ」や「コロコロ」と片仮名で表記した発言について、ムクドリは様々な鳴き方をするという話をした際に図鑑に載っているムクドリの鳴き声を取り上げ、SCとして提示していたため、ムクドリと予想した児童には、曲のなかにそれを聞き取った者が多かった。自分なりに捉えた鳥の特徴と曲を結びつけて、曲の変化や音の高さに注目することができていた。

次に、曲② (《ムクドリ》) を聴いた [4-3] でのやり取りの一部を取り上げる。

T: じゃあ、予想したものを教えてください  
 C: スズメだと思います  
 T: 何を手掛かりに、そう思った?  
 C14: ときどき、チュンチュンって聞こえた気がするから  
 C6: 1曲目より、声の高さが結構高い  
 C13: 鳴き声の種類が少なかった。ずっと同じような感じ  
  
 C9: ムクドリだと思います  
 T: 何を手掛かりに、そう思った?  
 C9: 最初コロコロと速く聞こえた

スズメと予想する児童からは、スズメの鳴き声を聞き取っていたり、音の高さや鳴き声の種類が少なく曲がずっと同じ感じで変化が無い、という意見があった。曲想の変化があまりないことを聴き取ることができたと考えられる。[4-2] での曲①とは逆でムクドリと予想する児童は少なかったが、ムクドリと予想した児童のなかには、SCで提示した図鑑の鳴き声を挙げながら、速く聞こえたとして速度に着目している児童がいた。児童はムクドリにはさまざまな鳴き声があるという認識を手がかりにして、曲②は変化が少ないからムクドリではない、あるいは速いからムクドリである等、曲の特徴を捉えようとしていた。

次に、曲①②それぞれの冒頭を取り上げた[5]

でのやり取りを一部取り上げる。

T: 2曲目の方が音が高いつて言ってたけど、これみんなどう？分かる？  
 CC: わかるわかる  
 C9: 速さが違う  
 C12: テンポがもう、2曲目の方が速かった  
 C?: たしかに。1曲目は遅い

曲②はうるさい、という児童の発言を想定していたが、うるさいというような意見ではなく音が高いという意見が出たため、その発言を取り上げて共有した。また、音の高さやテンポといった音楽の要素を自ら曲のなかに捉えて言葉にしたり、他者の発言によってこうした要素にはっきりと気づく姿が見られた。ただ、児童の発言が「音の高さが違う」「速さが違う」というように、初めから音楽の要素に着目したものだっため、VTSの3つの質問にあるような「どういうところからそう感じたのか」という対話の進め方はできなかった。

次に、曲想が変化したと感じる部分を児童に問いかけた [6] の曲①でのやり取りを一部取り上げる。

T: 真ん中らへんでみんな変わったと思ったみたいだけど、どうして変わったと思ったの？  
 C8: なんか最初はゆっくりな感じがしたけど、ちょっとテンポが速くなった気がした  
 T: この部分は、スズメやムクドリのような様子を表現してると思う？  
 C15: お昼までずーっと寝てて、後半からはなんか、急げ急げって夕方になっちゃう感じがした  
 C5: メスを探しに行つて、後半はメスに好きって伝える感じがした

「真ん中らへん」と曖昧な表現をしているが、黒板にリボン状の紙を貼り、曲を数直線的に見えるようにした上で、リボンの真ん中を指し示

しながら話している。美術の鑑賞での「ポインティング（指差し）」は、対話のなかで発言の対象となっている箇所を指し示すことができるが、音楽は流れていってしまうので、曲の部分を共有するための工夫として可視化した。曲①の19秒経過したところで曲想が変化したと感じ取った児童が多くいた。変化した理由として、前半はテンポが遅かったのに対して後半で速くなったと聴き取っていた。

また、スズメやムクドリのどんな様子を表していると思うか意見を言う中で、C15の発言は、速度変化を捉えることによって「寝てる」状況と「急げ急げ」という気持ちを想像していることが分かる。C5の発言も、探しに行っている場面と、好きと伝えている場面の違いとして気持ちの高まりを捉えており、速度変化によって小鳥の心情の変化を感じ取っているのではないかと推測できる。曲をよく聴くことによって、テンポといった音楽の要素を捉えるだけでなく、様子や心情を想像することができ、それを皆に伝えることでお互いの想像力を刺激し合っている姿が見られた。

また、[6]での、上のC15の発言に至る実際の児童の発言は以下のものであった。

T: この遅い部分は、スズメやムクドリのどんな様子を表してると思う？  
 C8: なんか寝てそう  
 C2: 寝てる！？  
 C8: なんか前の方が寝てるというか、ぼんやりしてリラックスしてそう  
 C15: 居眠りしてるー  
 C8: そして、その後になんか変な…  
 C15: お昼までずーっと寝てて、後半からはなんか、急げ急げって夕方になっちゃう感じがした

C8の発言に対し、C2が驚いた様子で反応している。また、C8の意見を受けてC15は「居眠りしてる」と言い換えながら自分の意見を言っていた。C8が続きを言いかけていたが、C15が発言したことで聞き取ることができなかった。

問いかけに対して発言する中で、他の児童の意見を聞いて大きく反応していたり、それを受けて自分なりに考えたりしている様子が見られた。他者の意見に反応して見方を広げていく対話型鑑賞の一端を見ることができた。

最後に、[6]の曲②でのやり取りを一部取り上げる。

T：また真ん中らへんでみんな変わったと思ったみたいけど、  
どうして変わったと思ったの？

C12：なんか安定した感じのテンポだったんだけど、ヒューン  
ヒューンって感じて上がったり下がったりした

C4：後半から、なんか音が速くなった

C15：終わってから手挙げちゃった

ここでの「真ん中らへん」も、黒板のリボンの真ん中を指し示しながら話している。曲②は明らかに変化がないのだが、微妙に変化する開始9秒の部分で、曲想が変化したと感じ取った児童が多くいた。C12の「安定した感じのテンポ」やC4の「音が速くなった」という発言から、速度変化を聴き取ったことが分かる。C12の「上がったり下がったりした」というのは腕を上げ下げしながら話していて、速度のことか音の高さのことか曖昧だったので本人に聞き返すと、音の高さを表しているようであった。前半は高音で短い音が多いのに対し、後半は中音域で符点のリズムで上下するような旋律になっているため、そこを聴き取って特徴として言い表したのだと考えられる。速度の変化や音の高さの変化などを曲想の変化の理由として考えている児童がほとんどだった。

また、[6]では曲が変化したと思った部分で挙手をすることにしていたが、C15は「終わってから手挙げちゃった」と発言している。手を挙げようと曲を聴いていたが、曲中には挙げるところがなく終わってから挙げてしまったということであり、曲想は変わらなかったという意見として汲み取れる。しかし、授業内では、この発言を曲想は変わらなかったという意見として取り上

げることができずに次の活動に移ってしまった。曲②で変化したと感じ取った児童がこんなにも多くいるとは想定していなかった

また、変化した部分で挙手をする活動では、児童たちが「変わった！」と大きく反応しながら挙手をしていった。発見した喜びなのか、変化が明らかで自信を持って言っているのか、対抗心なのかまでは汲み取れないが、楽しそうに積極的に曲を聴こうとしている姿勢を見て取ることができた。

## 6-2. ワークシート分析

次に、ワークシートから分かる予想の変化から、対話による意見の変容が起こったのかどうかを分析する。ワークシート(1)で曲①をスズメと予想した児童は3名、ムクドリと予想した児童は12名。(2)で曲②をスズメと予想した児童は11名、ムクドリと予想した児童は4名であった。ワークシート(3)の2回目の予想で、曲①をスズメと予想した児童は4名、ムクドリと予想した児童は11名。(4)で曲②をスズメとして予想した児童は10名、ムクドリと予想した児童は5名であった。2回目の予想が1回目の予想から変化した児童の人数は多くないが、1回目で①②とも同じものを選択していたのを2回目で片方変えている児童もいた。そのため、ワークシートを見ると4名が2回目に予想を変えていることがわかった。

予想を変えた児童が、何をもとに変えたのか分析を行う。[4-1]で曲②を聴いて予想する際、比較して聴いたことで2回目の予想で曲①の予想を変えた児童や、[5]で曲①②の冒頭を比較したことを踏まえ鳴き声の速度を理由に予想を変えた児童、[4-2]や[4-3]で聞いていた他者の意見から、聴き直した際に鳴き声をもとに予想を変えた児童がいた。

上記の最後にあたる、聞き直した際に鳴き声をもとに予想を変えた児童については、最初、ワークシート(1)(2)で自分で予想した際には見られなかった、「キィーキィー」や「チュンチュン」などの鳴き声に例えた記述が、2回目の予想をした(3)(4)の欄に書かれていた。周りの児童が

「コロココロ」「キチキチキチ」など SC で示したムクドリ鳴き声をもとに聴き取っているのに影響されたのではないかと考えられる。

## 7. 成果と課題

本研究での成果と課題についてまとめる。まず、成果として、活動の中で児童が他者の意見に反応することで音楽の要素を意識して聴いたり、感じたことを主体的に捉えて他者と共有したりする姿が見られたことが挙げられる。

また、児童にとって身近な題材を導入に用いる、2曲を対比させるといった工夫によっても、音楽を鑑賞する際の主体性を促すことができたのではないかと考える。2曲を比較させることで1曲を聴き続けるよりも、より主体性を促すことができたのではないかと考える。児童にとって身近な教材を取り入れることで、自分の体験に基づいて積極的に聴こうとすることにつながっていた。

課題として、対話に重きを置いた鑑賞活動を行うにあたっては、ファシリテーターとしての教師が、児童のその場の発言をどう拾い広げていくのかといった力量が問われる。やはり教師がどれだけ教材研究に取り組むかが重要になってくる。例えば、先述した [6] での曲②の変化したと思ったところで手を挙げる活動の中で、最後まで手を挙げなかった児童に対し、その意見をよく聞かずそのまま授業を進めてしまったが、最後に手を挙げたというのはどういうことなのか考えたり、「あ、じゃあ変わるところが見つからなかったのかな？」という発問につながったりしたかもしれない。もちろん全部の発言を取り上げるのは時間的にも難しいところはあるが、対話的鑑賞にあたっては、そういった意見を見つけ拾っていく力も重要だと考えた。また、2曲を対比しながらスズメかムクドリかを予想する授業が正解を当てるクイズのようににはならないように声かけの工夫をしたものの、児童の発言につられて教師自身が「答え合わせ」と言ってしまう場面が二度あった。それでも、授業の最後に曲①②がそれぞれどちらなのか伝えた後、自分の予想が当たって喜んでいた児童はほとん

どおらず、正解か不正解かではなく予想することを通して曲を味わって聴いたり、自分なりに考えて鑑賞したりできたことに満足している様子が見られた。

今回は1時間の実践であったが、活動内容が多かったためもっと時間をかけて取り組むことも考えられた。また、一度の実践だけではなく音楽を聴く体験を積み重ねていくことで、より味わって聴こうとする姿、力を育むことができるのではないかと思った。低学年では特に、一つの活動に長時間取り組むのではなく短い時間で区切って様々なことに取り組む方が集中力も続きやすい。常時活動として鑑賞を取り入れられるようであれば、例えば冒頭15分で取り組み、あとはまた別の活動を行うといった形式で続けていくと、積み重ねていくことで身近な体験に必ずしも結びつかない多様な音楽も主体的に聴くことができるようになるのではないかと考えた。だが、今回の実践では、活動が切り替わるたびに児童から「答えはまだ？」と聞かれたものの、飽きて活動が嫌になるような様子は無く、予想しようとする姿が見られた。鑑賞の授業をどのように体系的に行い、積み重ねていくべきかは今後の課題として考えている。

## 8. 参考・引用文献

- ・小学校学習指導要領(平成29年告示) 文部科学省(2017)
- ・小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編 文部科学省(2017)
- ・小原光一他『小学生の音楽3』教育芸術社(2025)
- ・フィリップ・ヤノウィン『どこからそう思う？ 学力をのばす美術鑑賞』淡交社(2015)
- ・京都芸術大学アート・コミュニケーション研究センター、福のり子、北野諒、平野智紀『ここからどう進む？ 対話型鑑賞のこれまでとこれから アート・コミュニケーションの可能性』淡交社(2023)
- ・蒲谷鶴彦、松田道生『日本野鳥大鑑 増補版』小学館(2001)
- ・次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議

- のまとめ(第2部) 音楽科 文部科学省(2016)  
[https://www.mext.go.jp/content/1377021\\_1\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1377021_1_4.pdf)
- ・「小・中学校学習指導要領 Q&A 音楽に関する  
こと」文部科学省(2018)  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/qa/07.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/qa/07.htm)
  - ・「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改  
善の視点について」国立教育政策研究所  
(2020)  
[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/r02/r020603-01.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r02/r020603-01.pdf)
  - ・「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改  
善の視点について」国立教育政策研究所  
(2020)  
[https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/r02/r020603-01.pdf](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r02/r020603-01.pdf)
  - ・難波博孝・三原小学校(2007)『PISA 型読解力  
にも対応できる文学体験と対話による国語  
科授業づくり』明治図書
  - ・奥田秀巳(2022)「対話型鑑賞の展開の方向性に  
ついての一考察」『大学美術教育学会「美術教  
育学研究」第54号(2022)』 p57-64  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/uaesj/54/1/54\\_57/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/uaesj/54/1/54_57/_pdf)
  - ・岡田匡司(2010)「対話型鑑賞、鑑賞能力(美的  
感受性)の発達、鑑賞批評メソッドの研究—  
読解的鑑賞の準備的論察—」  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/aaej/31/0/31\\_KJ00006203462/\\_pdf-char/ja](https://www.jstage.jst.go.jp/article/aaej/31/0/31_KJ00006203462/_pdf-char/ja)
  - ・松田京也・藤田文子(2023)「中学校音楽科鑑賞  
の授業実践における教員の対話の展開に関  
する研究—ICT活用と美術における「対話型  
鑑賞」を手掛かりに—」『茨城大学全学教職  
センター研究報告(2022)』 p176-187  
[https://center.edu.ibaraki.ac.jp/doc/rep\\_kenkyu/ronbun\\_2022\\_10\\_176-187.pdf](https://center.edu.ibaraki.ac.jp/doc/rep_kenkyu/ronbun_2022_10_176-187.pdf)
  - ・松村淳子(2024)「対話型鑑賞」に対する批判『名  
古屋芸術大学研究紀要第45巻』 p123-137  
<https://www.nua.ac.jp/research/files/pdf/3c663a0ac68229383295dc4e861cc09b.pdf>
  - ・保坂直行(2019)「小学校音楽科における主体的  
に鑑賞する児童の育成」  
<https://www.edu.yamanashi.ac.jp/wpcontent/uploads/2019/12/ca554af03bb64c9c0e66700bda92212a.pdf>
  - ・Hinoe EuforiaCh.(2023)「スズメ(幼鳥)の鳴き  
声 地鳴き\_その5【野鳥観察】」  
[https://youtu.be/MpCXXQ6lVjg?si=dy4VQlq\\_eqVIMwggw](https://youtu.be/MpCXXQ6lVjg?si=dy4VQlq_eqVIMwggw)
  - ・ロッキー(2017)「ムクドリの鳴き声～叫び声～  
Gray Starling」  
<https://youtu.be/m5tDbm8EE0w?si=bKoBaYyjCqTCB7Y4>